

壺屋焼物博物館の提案から完成まで

真喜志 好一

壺屋の求心力

壺屋は焼物という生業を300年余も保ち続けているとはいえ、戦後の新しい町民の移住や、かつての農地の市街化などで薪で窯を焼くことが困難になり、上焼きの登り窯の火が消えて20年あまりになる。荒焼きの「南又窯」も久しく焼物を生んでいない。

そのような壺屋に焼き物博物館をつくる意義はどこにあるのか。

1995年秋、提案を作成するにあたって自問自答していたことである。

提案をまとめる軸が定まらず、プロポーザルの提出期日を間近にした土曜日の午後、壺屋のIさんの陶房をたずねて雑談をしていた。そこに白人にしては小柄でかわいい女性が入ってきて、Iさんの作品を熱心に見ている。

「ふたつのうち、どちらが好きですか」

きれいな日本語で私に問う。

「こっちですね。Iさんの味わいがしっかり出ていると思います」

「よかった。私もこちらが好きです」

8寸ほどの皿を求めた。

聞くと、オーストラリアの女性で、東京で舞踏を学んでいるという。もともと焼き物が好きで、英文の旅行ガイドブックに壺屋が紹介されているので旅の一日を壺屋の散策に当てているという。

そうなのだ。

「焼きもののふる里」としての壺屋の求心力は依然として強いのだ。

壺屋の通りを歩きなおす。豊かな陶土と広い敷地を求めて工房を移転した窯元も、壺屋にそれぞれの直営店を構えているではないか。「焼きもののふる里」としての求心力はしっかりと生きている。それを強めるのが博物館の役割だ。壺屋の「登り窯」の復活までを見通した提案をまとめようと軸を定める。

次の20行ほどは「共振する博物館」と小見出しをつけた提案書の一部である。

過去を学び、現在を考え、未来をイメージするために博物館はある。東又窯、南又窯などを保存するにとどまらず、再生させる夢も持ちたい。観光客や市民も遺跡化した窯よりも生きた窯に深い感銘を受けることだろう。

南又窯、ニシぬ宮、予定されている町民会館とに空間の整合性を持たせつつ、がじまる、せんだんの老木を生かした広場をつくる。カーミーヌーブや焼物市など壺屋の様々な祭りやイベントが広場から「ヤチムン通り」に繋がる広い階段で繰り上げられるだろう。

地域の連帯意識を刺激し覚醒させる場になり、そして町民の全てが焼物を知り、都市の中の「ふるさと壺屋」を愛し、時間の経過とともに登り窯の火を復活させようとの気運が高まると素晴らしい。

人びとに支えられ、生きた窯、生きた壺屋、そしてアジアの陶磁器世界と共振しつづける博物館。それがこの地につくる焼物博物館である。

展示設計との共同作業

展示基本設計との役割分担と共同作業との関係を、次のようにプロポージアルで記して置いた。

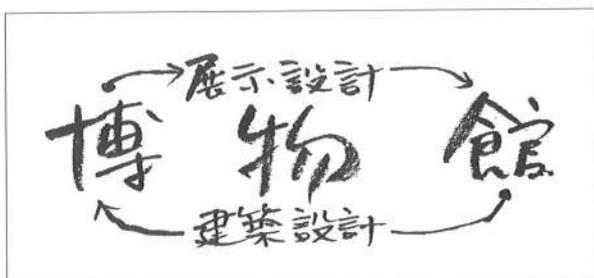
「展示設計者と建築設計とが、壺屋に博物館を建

てる意義を共有し、利用者の視点にたつて設計を行う事を前提にすれば、展示と建築との役割分担、そして共同関係が自ずから明らかになる。

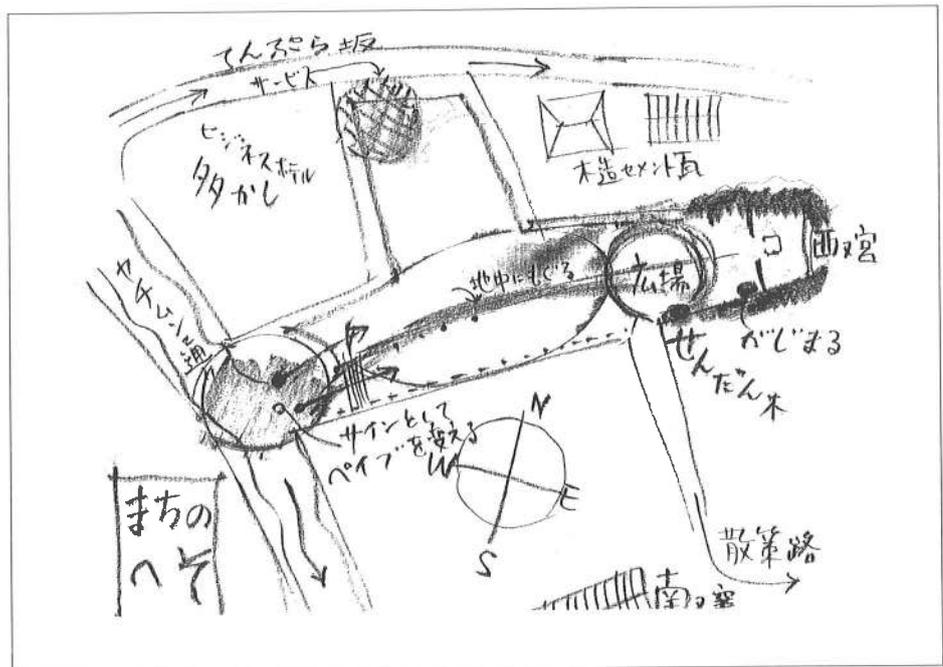
それぞれが相手の分担する分野に一定の知識と理解力が必要であり、博物館の文字を使って表現すると、

展示設計は 博→物→館 へとソフトからハードにアプローチし

建築設計は 館→物→博 へとハードからソフトにアプローチする。



それぞれに作業手順や比重のかけ方は違うが、博物館の設計においては展示と建築は車の両輪で



「まちのへそ」として提案したスケッチ

ある。互いの能力を十分に出し合い、補完しあつて設計を進める」

展示構想委員会が組織された。私も会議に加えてもらいつつ、先行していた展示基本設計チームとの顔合わせがセットされ、次のことがお互いのあいだで確認された。

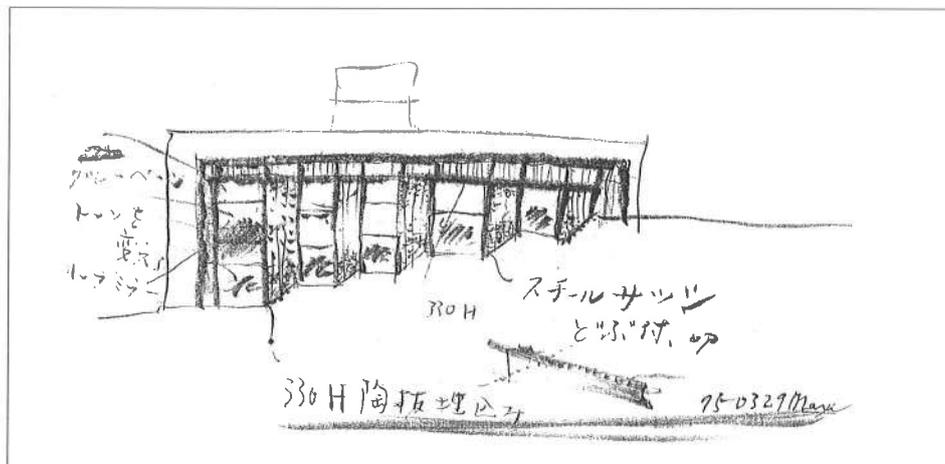
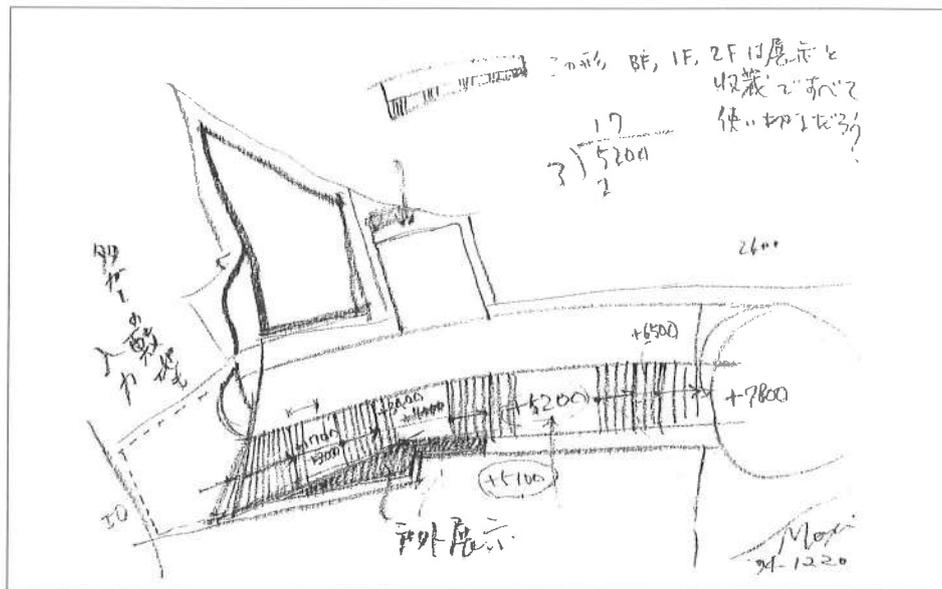
「私たちにとっては、たくさんの仕事の中のひとつかもしれない。しかし那覇市民にとっては唯一の焼物博物館なのだ。そのことを意識して共同作業をしましょう」

文字通りの共同作業がはじまった。

敷地は、道路から「ニシぬ宮」まで8mほどの高低差がある細長い敷地。

登り窯をイメージさせつつ、外階段と内階段が平行に上がり、広場をつくる構想をまとめる。

変形の敷地に「はめ絵」のように平面を書き込んでいく。



設計にとりかかったころの平面と断面のスケッチ

かなり展示設計と建築の基本設計がまとまった頃、東京から5名ほどの展示チームが加わっての打ち合わせ。一日の疲れをとりつつの夕食。

「展示室、きゅうくつですねえ。どうにかしたいですね」

「ほんと」

「敷地は細長いし・・・」

「ニシぬ宮への外階段を狭くするわけにはいきませんか」

「それはちょっと・・・」

「建築で主張している場所性が薄れますものねえ」

「玄関から展示室、2階の展示室を抜けるまで50mもあるのに・・・」

紙ナフキンを広げ、ラフに平面図を描く。

「玄関ホールにプロローグを持ってくると、どうでしょう？」

一瞬、みんなのハシがとまり、

「食事を早くすましましょう」と切り上げ、深夜までの検討が続いた。

展示室のリズムがゆったりしてきた。

「良くなりますね。書き直します」

数ヶ月の作業を振り出しにもどすという展示

チーム。

「建築の柱の位置は、展示の方にあわせませう」

しばらく、ファックスでのやりとりが続いて柱の位置が決まった。

敷地の発掘調査が始まり、見学会が開かれた。調査スタッフの説明に聞き入る多くの市民。発掘現場を、そのままガラスのドームでおおってしまうイメージが去来するが、目的としている博物館を建てる敷地の余裕はない。

目の前にある「ニシぬ窯」を、現位置に残しながら工事を進めることは不可能だ。

頭の中に設計中の図面を描く。「ニシぬ窯」は、現位置から少し南に寄ってしまうが、高さはほとんど同じ位置に納まる。建築の柱間隔を調整するだけでよい。展示スペースにも影響が出るので、展示設計チームと相談しているところに、文化課金武課長から電話がかかる。おびたしい発掘物にあふれた文化課分室で「ニシぬ窯」と「窯のはぎとり」を入れることを即決した。

町民の積極的な協力と参加と工事

基本設計がまとまった頃に、文化課のきもいりで模型や図面を示しての説明会が開かれた。

壺屋の人たちが問う。

「外階段の途中が狭くなっているのはなぜですか」

「敷地境界線がへこんでいるのです」

その場でエイイチさんは、外階段まわりと映写ホールまわりの敷地を譲渡すること快諾して下さり、ゆったりした階段にできた。

壺屋陶器事業協同組合は、陶板と手洗い器の製作に加わった。

工事が始まると同時に、県から提供を受けている「湧田窯」と現場で掘り出した「ニシぬ窯」の吊り込みができないという。検討不足の問題が指摘された。

現場スタッフは、次の解決案を示してきた。

- 1・工区をふたつに分け、奥の方を「ニシぬ宮」広場レベルまで先に施工する。
- 2・クレーンを奥の工区に横付けして、窯を吊り込む。
- 3・湧田窯は、広場レベルをコロで水平移動させる。
- 4・「ニシぬ窯」を吊り込んだ上で、階段型枠を作り、コンクリートを打つ。
- 5・道路側の地下倉庫部分は、以上の作業を完了してから掘り始める。

他に解決策はない。狭い道路を現場まで入れるクレーン車のサイズ、能力まで検討され、無事に吊り込みが完了した。

展示工事も終わり、すべてが完成してみると、これらの苦勞と工夫のあとは見えない。関係者の皆さん、ご苦勞さまでした。



1996年11月11日 博物館に吊り込まれる「ニシぬ窯」